■有明臨海地域開発の構想

大規模な港湾と用地計画

―― 有明地域について、現在までのところ考えられているものは、まだ計画と云うより粗案、構想と云つた線に近いんだ。しかしその後八月中旬には有明製鉄の第一期生産計画も県に示されたし、またちかく、もつと具体的な計画が示されることになつている。

これに伴なつて電力の問題、関連産業その他計画上の問題点も次第にはつきりしてくると思われるので、なるべく早く計画を固めていくことが必要だね。

この点を含んだ上で、まず港湾、工業用地の造成計画から説明しよう。

この航空写真（三頁）と地図（左上）を見てごらん。長洲地域には、対岸の島原半島の多比良港との間の航送船の基地となつている長洲港があるが、これは規模が小さくて大型船や沢山の船ははいれない。ある程度砂鉄採取船の出入りなどに支障をきたさないように、現在の長洲港そのものの整備も必要だが、製品の積み出し、関連産業の利用などを考えると別に相当な規模の港湾を建設しなければならない。

また有明製鉄では将来東南アジア地域から「ラテライト」（鉄鉱石の一種で莫大な埋蔵量があるが、従来は不純物が含まれていて処理方法がなく、未利用のまゝ放置の状態）の輸入も考えられている。

そこでこの図のように、長洲港の南、浦川、菜切川の川口に四～五千屯級の船が横付けできる港を新しく設けようという計画なんだ。

太郎 東南アジアから「ラテライト」を輸入するという段階になれば大変ですね。

―― そうだね。二～三万屯級大型船で輸送すると云うことだから、そうなればこの計画を拡張するか、あるいは別の方法を考えなければならなくなるだろう。

工業用地三百万平方メートル

太郎 工業用地はどうなるんですか。

―― この図をみてごらん。港湾計画を挾んで第一期には長洲港の南側に北側に百三十五万平方㍍（四十一万坪）と百六十八万平方㍍（五十一万坪）合計三百三万平方㍍を昭和四十年度頃までに埋立てて造ろうと云う計画だ。この面積は、有明製鉄の用地百六十五万平方㍍（五十万坪）と、その関連産業用地を大体同じ程度と考えて計画したものなんだね。

太郎 この図の長洲港の北側から荒尾の方へかけての埋立計画はどうなんですか。

―― うん、これは第二期、第三期と云う考え方で、将来の工場誘致計画あるいはそれに見合う工業用水その他の受け入れに必要な、いろいろな要件などの見とおしをたてて、具体化することになるだろうね。

太郎 何といつても大変な仕事ですね。

工業用水は専用水道で

―― うん、そうだよ。いゝところに気がついたな。道路の整備、工業用水道の建設という大切な仕事もある。道路は工場地帯と住宅地帯、あるいはこれらといまの二級国道熊本～佐賀線との連絡道路さらに玉名市、荒尾～大牟田市などとを結ぶ新しい道路の建設が考えられているんだが、道路輸送の比重は年とゝもに益々増大していく傾向だから、思い切つた計画が必要なわけだ。

それには莫大な資金がいるんでしょう。一体どのくらい……？

―― 第一期の港湾、埋立計画に要する資金は約五十億円と見込まれているが、県財政面で無理があれば、他県でも行われているような、会社からの予約金納入の方法をとるとか、あるいは会社に直接工事をやらせる方法なども考えられるね。

県としては、他にやらなければならない仕事も多いし、大局を考えて方針を決めることになるだろう。

漁業補償を適切に

太郎 話はかわりますが、有明海はのりの養殖が盛んだし、アサリ貝もとれるしそんな漁業補償はどうなるんですか。

―― うん、この問題も県としてしつかり考えているんだ。関係者の方々のご協力が得られるような適切な補償と、その転業対策、将来の生活安定を十分考えていくことが肝要だと思うね。

太郎 そうですね。ところで、これまでお聞きした港や工場用地だけでなく、工場を誘致するとなると、そのほかにも、道路とか用水路とかの問題もいろいろあると思うんですが……

太郎 工業用水は足りるんですか？

―― この地域は相当地下水が豊富なので、かなりのところまではこれで賄えるが、将来はどうしても菊池川の水を引つ張つてこなければ間に合わないね。

そこで考えているのが玉名平野の土地改良をやるために改修を計画している菊水町内の白石堰を利用して、一日に十七万立方㍍余り（毎秒二立方㍍）の水を取り入れ、専用の工業用水道を新たにつくつて、これによつて給水しようという計画だ。このほかに、国鉄自身の鹿児島本線複線化、電化計画があり、まだはつきりしていないが、住宅地帯の造成計画も進めなければならないというわけだよ。

■有明地域の工場誘致

有明製鉄の建設プランは

太郎 なかなか大変ですね。ところでかんじんの有明製鉄の建設計画や、関連産業の誘致の見とおしはどうなんですか？

―― 有明製鉄の建設計画は、さつきもいつたように、八月中旬県に示されたんだが、それによるとこれまで伝えられているように将来（昭和四十年度以降）鉄鋼一貫（製鋼、圧延まで）百万屯まで拡張することを目標にしているが、当面の第一期計画では、今年度後半から四十年七月までにロータリー・キルン（電力使用量を節減するため、砂鉄を半還元し、海綿鉄を作るための炉。本誌十五頁「交差点」参照）四基、電気炉二基を建設し、海綿鉄を年産六十二万四千屯、電気銑二十八万三千屯を生産する計画になつている。

そしてこれらに要する資金は、用地を含んで約五十四億円が見込まれているというわけだ。第一期計画がこのように決まつたのは、電力問題からのようだ。

火力発電所もつくる？

太郎 といゝますと……？

―― 君も学校で教わつただろう。電気銑鉄を製造するためには、非常に沢山の電力がいるんだ。しかも電力料金が安く（KWH当り三円以下で）なければならない。先々のことを考えると、九電からの買電だけでは駄目なようだから、九州電力、三井鉱山、会社が共同して独自の火力発電所を建設しようという計画が検討されているんだ。この計画が実施されることになれば、建設期間が二年半から三年かゝるから、これが完成するまで百万屯規模への拡張は待とうというわけだ。県ではこの共同火力発電所もぜひ長洲地区に建設してもらうよう要望しているよ。

関連産業の誘致も

太郎 それが長洲地区にできればいゝですね。ところで、県ではいろいろな関連産業も誘致するように力を入れておられるそうですね。

―― そうなんだ。関連産業の誘致も八幡製鉄と有明製鉄に対して協力してもらうように要望している。

太郎 どんな工場が見こまれるですか？

―― まず期待されるものとしては、機械、部品、鋼材、化学、酸素、アルミ工業などがあるが、多分に電力問題、共同火力の成否に左右されるんじゃないかな。またこれらの関連産業の誘致とゝもに、県内や地元の下請け中小機械工業などの育成と振興に努めることがぜひ必要だな。

太郎 色々困難な問題が多いでしようが県内の雇傭の機会も増大するし、僕達若い者にも希望が生れますので、県でも頑張つて戴きたいですね。

では次に八代地域の開発計画はどうなつていますか。

■八代臨海地域の開発計画

年内には大型船も入港か

―― 八代地域の開発は、さつきも云つたように、これまでは港湾の整備が重点として進められてきたが、今では内港の整備も一段落し、阪神、京浜地区との定期貨物船（三百～五百屯級）も就航したりして、利用も段々と活発になつてきた

また三十三年度から着工した外港の修築計画も、地元四大工場の工事資金負担協力などによつて工事は着々進み、年内には四～五千屯級船舶が横着けできる岸壁一バース（四十年度までに一万屯級船舶が横付けできるよう岸壁を延長する）が完成する予定で、いよ／＼待望の大型船が入港するわけだ。

引き続き四十年度までにさらに一バースの建設が進められることになつており その後四十五年度までには一万屯級と四～五千屯級岸壁それぞれ一バースの増強計画も決まつている。

太郎 大型船が続々入港してくるという十年後の八代港は、想像するだけでも楽しいですね。

―― そうだね。その頃の熊本県は、県民所得もいまの二倍半に増えているし、見事な発展をとげているだろうね。単なる夢物語でないだけに、よけい楽しみだな。

太郎 その工事は一体どこがやるんですか。県ですか？

―― 昨年度までは県がその事業の主体者であつたが、本年度からは運輸省直轄で工事をするよう切り替えられたんだ。

太郎 用地造成はどうなんですか。

―― これも内港地区に十六万平方㍍（約四万八千坪）ができているほか、外港地区に約百八万平方㍍（三十三万坪弱）の造成を計画しているよ。

太郎 あまり広すぎてどうもピンときませんが、広々とした工場用地が着々とできているんですね。

―― そうだよ。それだけではない。さらに八代港干拓の北側大島地区に約三百